

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医学科

職階 教授

氏名 坂上元栄

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3 年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

学部教育では、基礎獣医学系に所属する解剖学・組織学・発生学を担当する教員として、主に表に記載科目のコーディネートと教育を実施した。これらの科目については、総じて獣医学科と動物応用科学科のカリキュラムツリーに示されている、高次学年の専門科目の学修に必須である基礎的な知識、即ち肉眼及び顕微解剖学的構造・名称を獣医組織学、動物機能解剖学、動物解剖・生理学実習、獣医組織学実習にて修得させ、また、それらの構造が形成される発生過程と名称を獣医発生学及び動物発生学で修得させる責任を負う。大学院教育表内⑧、⑨では、獣医組織・発生学特論及び同演習、前述の知識を元に最新の研究論文を題材に論理的な思考と多角的な視点を持つことを養わせる責任を負う。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
獣医組織学	獣医学科	必修	1	144
獣医組織学実習	獣医学科	必修	3	151
獣医発生学	獣医学科	必修	2	187
動物機能解剖学	動物応用科学科	必修	1	165
動物解剖・生理学実習	動物応用科学科	必修	2	161
動物発生学	動物応用科学科	選択	2	91
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	1
卒業論文	動物応用科学科	必修	4	1
総合獣医学	獣医学科	必修	6	132
動物応用医科学特論Ⅱ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	2	5
獣医組織・発生学特論	獣医学専攻	必修	1	1
獣医組織・発生学特別演習Ⅰ	獣医学専攻	必修	1	1

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

「わかりやすく適度にわかりにくい講義・実習」を教育理念とする。

獣医組織学、獣医発生学、獣医組織学実習、動物発生学、動物機能解剖学、動物解剖・生理学実習について：育てたい学生像は、初期学年の学生に生体の構造を理解して専門的な名称を記憶し適切に使用できるとともに、興味・疑問について単に質問するだけでなく自ら積極的に調査・学修をする能動的学生である。

科学の伝達、卒業研究、動物応用医科学特論Ⅱ、獣医組織・発生学特論、獣医組織・発生学特別演習について：育てたい学生像としては、自分自身の伝えたい内容を明確かつ理論的に相手に伝えるプレゼンテーション及びコミュニケーション能力を持つ学生であり、専門的な研究論文や自分自身の卒業研究の内容について発表・質問・討論できる学生である。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

「動物応用科学科の専門科目教育」や「獣医学科のライセンス教育」にとって、担当する科目は用語や構造を覚えることが主たる目標となる。覚えて記憶を定着するためには「わかりやすい講義（プリント）」を利用するのは良い方法であるとされているが、これらは学生にとって受動的なものである。記憶し定着するためには学生自身が「調べる・考える」といった能動的な作業も効果的であると考えことから、このような能動的な作業が生じるような講義・実習を目標とする。能動的な作業が生じるような講義・実習にするためには、わかりやすいだけの講義・実習が必ずしも良いというわけではない。学生自身で分からないことを自覚（問題提起）させ、自ら調査・質問するといった方法を思考させる（問題解決の検討）ことで能動的な作業を身につけさせる。また、一学生の質問を全学生で共有することも、他の学生にとっては気づきを与える。このスキームを動かすために次の（ア）から（エ）を行った。

（ア）講義プリントには獣医学科ライセンス教育及び動物応用科学科専門教育に必須なキーワードや項目を記載し、それに対して理解するのに必要十分な図表は記載した。講義内での言葉でこれらのキーワードや項目をつなげて説明した：読めばわかるといったいわゆる「わかりやすいプリント」では自分では考える機会がなくなってしまうが、キーワードと項目、必要最低限の説明の記載にすることで、「講義を聴く必要」があり、学生自身で教科書などを調べて「プリントを補う必要」が生じる。

（イ）講義内容は動画にして基本的に講義直後にアップロードし期末まで公開した。

（ウ）質問は主にLMSのディスカッションを利用して質問させた：昨年度LMSのディスカッション機能で行い、より利用しやすくした。一学生の質問を全員で共有することができるため、他の学生が疑問に思わないようなことを気づかせることができる。質問に対する回答は極力対話形式とし、教科書などの調査が不足している様であればその学修を促し、講義では話さなかった部分を発展的に加えた。SNSアプリLINEを使用した（ICT活用について参照）。

（エ）課題として毎回「講義内容で試験問題を2題作成すること」を設定し提出させた。また、この課題は全員のものを全員に公開した。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

- ・ 質問の受付についてLMSを利用して対話形式で行った。自分から質問をするという能動的な行動を気軽にさせること、また、質問内容を共有することで他の学生が気づかなかった部分を気づかせることを目的とした。
- ・ 講義中の学生との対話として、LINEのオープンチャットを使用し、教員からの出題と質問、それに対する解答や回答を行った。リアルタイムで全員が使い慣れたLINEを使用してレスポンスが可能で匿名であるという点も質問しやすいと授業評価でも非常に好評であった。
- ・ 課題として「問題作成」を課すことで、講義内容の復習（内容の反復）、問題になりそうな部分の抽出（内容理解）、問題文と選択肢の作成（文章作成と内容の確認）を行わせた。問題は全学生に匿名であるが公開される点も課題への取り組みに影響を与えたと考える。

(2) ICTの教育活用

有

- ・ 講義動画を作成し、オンデマンド形式でいつでも何回も視聴できるようにした。ただし、学習効果を高めるために、視聴期間は期末までとした。
- ・ LMSを使用し受講者全員と質問の共有を行った。
- ・ SNSアプリLINEオープンチャットを使用した。LMSで質問する場合、質問した学生の氏名が特定されることからこれを嫌う学生がいたことから、Lineフリーチャットを使用した。手軽に質問できるなど非常に良好だった。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

- ・ 講義では、動画も同時に収録した。長期間にわたり複数回の視聴が可能となり、理解の助けとした。
- ・ 配布プリントはすべてPDFファイルとすることで、今までの印刷物配布という形式ではできなかった、図のカラー化や添付図増量が可能となった。
- ・ PDFファイルA4の1ページ内に1スライドのものを用意して、写真や図が見やすく、メモがとりやすいようにスペースがあるようにした。

(2) 学生の理解度の把握

A

- ・ 獣医組織学と獣医発生学では中間試験を実施することで、学生の理解度を把握した。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

A

- ・ 獣医組織学と獣医発生学では中間試験を実施することで自習を促した。
- ・ LMSのディスカッション機能を使用することで気軽に質問する環境をつくり、自学自習につながるようにした。
- ・ 「問題作成」の課題を課すことで自然と復習させるようにした。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

- ・ 対面講義・実習の実施が限られる中で、LMSのディスカッション機能での対話形式での質問対応を行った。LINEのフリーチャットで講義中に問題を出して回答してもらうなどした。対面での質問でもできるだけ丁寧に対応した。

(5) 双方向授業への工夫

A

質問はすべてLMSのディスカッション機能を利用して質問させることで、一学生の質問を全員で共有することができるため、他の学生が疑問に思わないようなことを気づかせることができる。質問に対する回答は極力対話形式とし、教科書などの調査が不足している様であればそれを促すようにするとともに、講義では話さなかった部分を発展的に加えた。講義中にはLINEのオープンチャットを使用して問題出題や質問などを受け付けた。

(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

B

基礎獣医学系なので特に対策はこれらの講義では特に国家試験対策は行わなかったが、過去に出題されている部分などを引用して重要性を部分的に強調した。総合獣医学では対策について、担当科目「獣医組織学」「獣医発生学」内での分野別出題傾向を講義した。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）授業評価アンケート結果の授業への反映

プリントがわかりにくいとのことだったので、説明文を追加するなどして改善した。以降、毎年プリントを改訂している。

（２）（１）の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

図が多く理解しやすいという評価が増加する傾向にある。

（３）（２）を踏まえた次年度の取組

引き続き図を多く取り入れて口頭での説明を充実させる。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

試験問題をつくらせることを課題にする：毎回の課題として、講義内容を範囲として二問をつくらせ提出させる。講義の内容を復習し見渡すことでどこが大事かを自分で見極められる様になることを目指す。

（２）（１）の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組 に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

エビデンスはないが、全体的に勉強をするような雰囲気を持つ学生が増えたように感じられる。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

- ・2023/7/10実施 FD研修会「『グッド・ティーチング 賞授賞者から学ぶ“授業の工夫”』及び『教育改善プログラム成果報告』」
- ・2023/12/22実施 F D 研修会「本学のディプロマポリシー（DP）に関する分析結果および学生の学修成果の可視化」
- ・2024/9/20実施 FD研修会「教育職員免許法と本学の教職課程について」

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

短期目標：すべてわかりやすいわけではない配付資料を作成する。オンデマンドで動画の視聴が講義後も可能なので、できるだけ講義での説明を充実させることで情報を補い、講義後の視聴による復習を促し定着させる。

長期目標：学生のモチベーションを増加させる手法を確立する。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

- ・LMS 動物機能解剖学 課題，同 提出された課題のまとめ，同 講義動画
- ・LMS 動物発生学 課題，同 提出された課題のまとめ，同 講義動画
- ・授業評価結果